「英語に於ける名詞的表現の諸相」

小　林　永　二*

On some aspects of noun-centered expressions in the English language

Eiji KOBAYASHI

I　「英語に於ける名詞的表現の諸相」

永年英語を研究し続けて来た者の感想としてその英語の魅力はどこにあるのかと問われるならば，その有力な決め手の一つとなるものに英語における名詞的表現の多用と云うことが考えられる．而してこの名詞中心の表現法と云うものは如何なる効果を英語に与えているのであろうか．特に日本語を母国語としている英語学習者にとっての英語の魅力が奈辺に存するのかに就いては，人によって勿論多様であり，それこそ Tastes differ と云うことで何とも一概には云えないのであるが，英語表現のある特定の性格を浮き彫りすることにより，尠くとも英語の持つ特性なり，人に与える印象の効果なりはつかめるのではないかと云うのが本小論文の狙いとするところである．例えば我々が普段英米の映画や音楽その他実際に彼等の会話のやりとりなどに接して先ず感じることは，非常に彼等が表情豊かであり，顔全体の筋肉が従横によく動いていること，更にその感情なり意志なりが，日本語に於けるコミュニケイションにおいてよく見られる，その対話者間の地位，身分，職業，性別，年令別 etc. の謂わば直接のコミュニケイションには関係のない諸要素によってそのコミュニケイションが直截に行なわれず，婉曲に含みを残したかたちで行われる典型的な日本的 communication でなく，対話者相互間においてあくまでもより正確・迅速な情報の交換こそが対話において top priority を求められるべきであると云う暗黙の了解が存している様に思えることである．従ってその会話のやりとりは非常にスピーディ且つ簡潔で力強く，我々婉曲で含み，余韻の多い日本語的コミュニケイションに馴らされた者にとっては，一種の迫力さえも感じられるのである．それではこの簡潔さ，力強さ，迫力と云ったものは何処から来ているのであろうか．それは先述した如く，英米の文化的背景の日本との相違から来る人間関係・人倫関係の相違から来るのがその一因であることは否めまい．例えばその最も顕著な一例としては，英米ではよく大学の学生がその教授を呼ぶのに on a first name basis で呼んでいる例がある．又謂ゆる girl Friday がその上役である社長・重役に対してやはり first name で呼んでいる例が見受けられるが，これなどは先ず日本で同じ場面でその様なことが行われるかと問うた場合，とてもその様なことは想像だにつかないことは日本的文化背景で育った者であれば自明のことであろう．そこまで行かなくとも，日本では夫婦間においてすら夫は妻を first name で呼ぶことはあっても，妻が夫を first name で呼ぶことはまずまず稀れであろう．更に兄が弟を first name で呼

* 英語英文学研究室（昭和57年9月16日受理）

ぶことがあっても，弟が兄を first name で呼ぶこともまずあり得まい．つまり日本的人間関係の下では上述の如く，すべてはその各人の置かれている地位，身分，職業更には生まれながらにして決められている性別，年令別 etc. によっても，すべてそれぞれの地位身分，立場に「ふさわしい言葉遣い」が頑くなに守られている，或いは暗黙の中に社会はその成員にそれを要求しており，もしそれが守られない場合には，それ相応の社会的制裁が加えられることになる．昨今テレビで放映される外国映画・ドラマ等はことごとく日本語に吹替えられているわけであるが，その場合，英文のシナリオ原文と日本語に吹替えられた dialogue とを比較してみればこのことは一目瞭然であろう．男言葉・女言葉の違いは当然ながら，更に日本語では幼児語・老人語までもが存在するらしい．これなどはまさに幼児・老人の置かれている社会的立場・役割が日本と英米諸国のそれとでは非常な違いのあることを証している．この様な例は枚挙にいとまがないので，ここではこのくらいで置くことにするが，ここで著者の指摘したいことは，これらの謂わば非言語的な要因がことばによる communication にも多くの影響を与え得るということなのだ．もっともこのことは考えてみれば当然すぎる程当然のことであって今更改めて云うほどのことでもないわけだが，我々ことばの研究にたずさわる者としては謂わばこの言語の背景にある文化的，社会的な要因にも留意して特定言語の研究に臨むことが望ましいことだと思う．併しここではそれら非言語的な要素の研究が本意ではない．ここではあくまでも純粋に言語の現象面に目を向けて，その実体に即してこれを分析研究し，その特定言語に頻繁に見られる特徴・特性を明らかにしてみたい．もっともその際どうしても若干の文化的背景の影響についても触れざるを得ない場合もあろうかとは思われるが，この小論文の中ではあくまでも言語の背景となっている心理的・文化的・社会的要因の分析研究には深入りしない．

さて英語をして英語らしさを特徴付けている諸要因は多々あるのであるが，ここではその中でも特に日本語に欠けていて，その意味でそれだけ「英語らしさ」がうかがえる様な英語の特徴・特性に就いて考察してみたい．そこで著者が永年興味を以て観察してきたものに英語における名詞中心的な表現或いは名詞へと収れんして行く表現形式について（謂ゆる noun-centered expressions）色々な角度からこれを考察してみたい．

ところで英語に於ける名詞中心的表現ときくとすぐに思い当るものとして，例の無生物主語・抽象名詞主語の構文，謂ゆる「物主構文」なるものが最先に頭にうかぶに違いない．全くそれは当然なことであり，確かにこの物主構文なるものは，あまり日本語には見受けられない，その意味でも又非常に英語的特性を具えた表現形式であることは間違いない．

例えば次の例文を見てみよう．

I hope tomorrow will find you any better. ここで注目すべきは云うまでもなく I hope 以下に来る that 節の中の主語として tomorrow が用いられているが，これは非常に英語的な表現であり，日本語ではこの様な表現はまずまず思いもつかないものであろう．日本語ではどうしてもこの tomorrow は主語としてではなく副詞として修飾語の働きを持つこと以上にはあり得まい．更に抽象名詞が主語ではないが補語として用いられている例に，

It is common knowledge that he is a good speaker of English. この文章の場合の common knowledge のくだりは非常に英語的である．つまり英語では形容詞＋名詞の結合となっているが，もし日本語の場合だと当然副詞＋動詞結合つまり commonly known となるであろう．更に that-clause の中の a good speaker of English の部分にしても日本語だとやはり speaks English well と云った方が，はるかに日本語らしいであろう．この例も英語では多々あり，例えば「彼女は料理が上手だ」と云う日本文に対して，英語では

She cooks well. よりは She is a good cook. と cook を動詞に使うよりは名詞に使う方がより自然であろう.

この小論文の標題が英語における名詞的表現の「諸相」となっている様に，その表現にも多様な相があり，決して単なる無生物主語のそれのみではない．いやこの無生物主語の構文についてはこれまで多くの研究者により指摘され，ひととおり英語学習者の誰れもが見聞してきたところであって，ここではあまり重複したくない．ただこの物主構文なるものが英語にその簡潔さ，力強さ，更には迫力を与えていることは否定出来ず，その意味ではこの物主構文が，英語の名詞的表現の中心的存在であることは当然でもあり又ここでの研究対象ともなり得るのであるが，先述した如くこれについては従来多くの研究もなされ，数多くの例も挙げつくされたきらいもあるのでここではこれ以上の言及は避けたい．

そこでここでは無生物 (inanimate) なものが主語として使われる構文ではなく，inanimate 或いは animate であるとを問わず，およそ名詞的なるものが，単に主語として用いられるだけではなく，広く補語にも，目的語にも，更には表現の広く深い分野で種々の形相を以て使用されている事例について種々考察してみたいと思うのである．その際勿論著者の頭の中には，それらの英語表現に代る日本語の表現が想定されており，その日本語の表現の中では，必ずしも名詞がその中心的役割を担っているのではなく，もっと他の品詞なり部分なりに表現の中心が置かれているのである．その様な日本語の表現との対比において，はじめて英語の名詞中心的表現の特徴が特に目立って英語学習者には感じとられるのであり，そのプロセスを通して英語表現の簡潔さ・力強さ・迫力に迫ってみたいと思う．

さてそれでは具体的に物主構文以外のどのような名詞中心的な表現が英語の中で見られるのであろうか．ここでは先ず，日常の具体的な生活の中での人間相互間の communication の仕方をめぐってのやりとりの中で非常にやはり日本語の表現とは異なった英語的な特性について考えてみたい．例えば人の呼び名であるが，日本ではあまり人名を呼び合う習慣がない様に思える．ここで人名を呼び合うと云うのは単に，Good morning, Mr. Yamada, と云った時に日本文では Mr. Yamada と面と向ってはあまり云わないと云った類のよく知られている例ではない．勿論それも日本語と英語の表現上の大きな相違にはちがいないが，ここではそのことではなく，英語では単に人名だけで済ませているのに，日本語では単に人名だけではなく，或いは動詞その他の附属語を借りて謂わば一つの完結した文章として表現しようとする，その様な例についてである．これは色々な場合が想定されるのであるが，例えば O. Henry の小説の話ではないが，仮りに或る人物同志が20年振りに再会したとした場合，相手を確認する時に，日本語では単に相手の名前を尻上りのイントネイションで“山田さん？”と云った具合で表現し得るであろうか．勿論不可能ではあるまいし，又そう表現することも万に一あるかも知れない．しかし日本語では先ずあまりその様な直截な云い方はせず，「山田さんでございましょうか」とか，「失礼ですが，お会いする約束になっていた山田さんでしょうか」etc. いずれにせよ，単に名前のみをぶつけるぶっきら棒な云い方は好まれず，やはり動詞その他の附属語を用いて文章として表現したがるのではなかろうか．勿論英語に於てもその様な場合，文章として表現することは可能であり，又そうする人もいるであろう．ただ著者が云いたいのは英語では intonation 一つでその辺の用事は済まされ，ただ名前のみをぶつける，つまり単に名詞一つを用いるだけの表現が広く使われていると云う事実である．更にもう一例，仮りにある店屋に客として入って行った場合，例の May I help you? とか What can I do for you? と云ったように英語でも完結した一つの文章としての云い廻しもあるにはあるが，併し同時に Yes?↗と云う単に一語の単

語を尻上りに発音するだけの表現もかなり広範に用いられている事実も見逃せない．この場合日本語では如何であろうか．確かに「ハイ」とだけおっしゃる店員も中にはいるだろう．しかし日本語ではやはりこれではあまりにぶっきら棒で，表現としては落着かないのではないか．やはり「ハイ，何に致しましょうか」等やはり一つの文章として完結しないことには安心しないのではないか．更に better な例としては電車の中での車掌の駅名呼称があろう．例えば日本では車掌は車中で次の様に云うだろう．「次は東京，東京でございます」云々と．ここで注目すべきは，「次は東京」まではよいとして，二度目の「東京でございます」のくだりが如何にも日本語的であることだ．つまり日本語ではやはり名詞をただぶつけるだけでは収まりが付かず，止むなくすぐその後で同じことをくり返して今度は文章体にして完結しようとするのである．この場合英語ではおそらく単に「Next, Tokyo」位いのところであろう．更に駅のトイレなどに置いてある灰皿などにもよく，「吸がらはここに入れて下さい」とか「吸いがら入れ」などと書いてあるが，この場合の前者は云うに及ばず後者の場合においても一見簡潔な表現の様に見えるが，これを英語と比べると驚くなかれ日本語ではまだ「吸がら入れ」の「入れ」だけまだ余計である．つまり「入れ」のことばの中にやはり日本語では一つの文章として完結したいと云う願望が秘められている．これを英語にすれば単に「cigarette butts」であり，これを直訳すれば単に「吸がら」と云っているだけである．更に「ここにゴミを捨てないで下さい」と云う場合も英語では単に「No Trash」なり「No Tipping」であり，更に「私は酒もタバコものみません」と云った場合も英語では単に名詞をそのままぶつける形で，「No smoke, no wine」とでもなろうか．更に試験の際教室で問題の訂正などのある場合，日本だと「訂正の箇所がありますので，訂正してもらいます云々」となるのであろうが，英語では単にひと言「Correction!」だろう．強いて云えば後に please が入る位か．例の演説の始まりの文句，Ladies and Gentlemen, だの，放送などの最初に Hello, boys and girls, etc. もすべて単に名詞を直接ぶつけているだけの表現であり，仮りにこの通りそのまま日本語で行えば，随分とぶっきら棒な日本語となるであろう．食堂で食事を済ませた後，"Waiter, check, please." なども典型的な名詞を並べただけの表現で，これを日本語でこの通り行えば，大ゲンカにでもなるであろう．警官に道を尋ねる場合も，Officer! と呼びかければ良し，若者に話しかける場合も Young man で良かろう．これを日本語でとなると，とてもこんな名詞一語のズバリとした表現ではケンカになるのがオチだろう．更に挨拶語にしたところで，Good morning, Good afternoon, Good evening, Good night, Merry Christmas, A Happy New Year 等々種々の挨拶用語があるわけだが，これらすべての英語をみてもわかる様に，英語ではすべて単に名詞をぶっきら棒に投げつけているだけで，後のこまかい nuance はすべて intonation で表現されるのにひきかえ，日本語では余程親しい間柄か平等な人間関係の中にいるかでない限り，この様な挨拶語をそのまま生のかたちでぶつけることには問題があろう．どうしても動詞その他附属語の助けを借りて文章体にしてあらわすしかないのではないか．我々は今名詞だけについて論じているのであるが，実はこの問題は単に名詞だけに限らず実は形容詞・副詞等々についてもあてはまるのである．つまり英語では形容詞なり副詞をただそれ一つだけで独立して用い，十分にその機能を果し得るのであるが，この点でも日本語ではやはり文章完結型にしないと，どうも落着かないのではないか．例えば上役の家の食事に招かれて食事中に「上手い！」と形容詞をそのままぶつける形の表現はあまり芳しいものとは云えなかろう．やはり「おいしいですね」とか「これはなかなかいけますね」等々の文章体となろう．英語の様にただ単に一語で「Good!」とは云えまい．

更にナイアガラの滝の前で英米人の様にただ一言 "Wonderful!" とは云えまい．やはり「すばらしいですね」とか「すばらしい滝だなあ」とか何かやはり文章体にしたがるのではないか．更にこれとは又若干かたちは異なるが，電話の受け答えの際に，This is Mr. Yamada. と云うところを．「こちらは山田ですけれど…」と云った具合に日本語ではやはり文章体でさえもそのままの形で断定的にぶつけることには抵抗があるらしいのである．これは何も電話の場合だけでなく，あらゆる平凡な日常の会話のやりとりの中にも見られる現象であって，関東方言によくある語尾に「ね，さ，よ」をつける云い方や，連用形の中止形で接続助詞をつけて，謂ゆる間をとって，断定的な云い方よりくるぶっきら棒な感じを避けるやり方など，すべてやはりこの英語の簡潔な力強い表現形式と比べると，日本語のそれはやはり冗長さと明快さに欠けるところのあることは否めまい．だがここで少し考えてみたいことがある．それは云うまでもなく，漢字或いは漢語表現の日本語特に謂ゆる大和言葉に与えた影響の大きさである．我々の用いている現代日本語の中には数多くの漢字・漢語が用いられ，又漢語的表現も使われている．勿論それらがすべて中国語において用いられている様な意味・用法・表現形式で用いられているわけではないことは云うまでもあるまい．併し数多くの漢字漢語を基にした語い，或いはそれらを組合せて表現された漢語調の日本語が，本来の大和言葉中心の語い，表現法とはかなり違ったものであろうことは容易に想像されるところである．

よく中国語の文法は英語と日本語との中間の辺りに存在すると云われる．併しその個々の語は殆ど単音節語より成り，その単音節語より構成されたそれぞれの単語の殆ども又可成り音韻・音声学的には簡潔で短音節の語が多いと思われる．この辺りは，英語においても本来の Anglo-Saxon 語の単語は非常に単音節のものが多く，人称代名詞や日常の基本的語いには特にその傾向が著るしい．この辺のところは他の欧州語とは英語はかなり異なっておりむしろ音声学的，更には名詞を中心にして，他の名詞を謂わば形容詞の如くその前後に並列させる表現法などは，むしろ英語は非常に孤立語としての中国語に近いと云えるのではなかろうか．実はこの特に英・中両国語の monosyllabic な性格は非常に重要な点で，特に日本語が polysyllabic な性格を具えていることを考え合わせると一層興味深い点である．Polysyllabic な性格をもつ日本語の中に数多くの monosyllabic な中国語の単語が入り込んできたことは，日本語の語いの簡潔さに寄与したところ大ではあったが，四声を欠く日本語に於ては，数多くの同音異議語を生じ，これが日本語をして aural-oral な言語から visual-descriptive な言語に変容させた demerit も否定し得ない．確かに中国語の孤立語としての性格は，名詞的表現に最適でむしろその点では英語を凌ぐ程の簡潔な力強い表現形式が可能である．そしてその様な性格を持つ中国語の洗礼を受けた日本語も又応分の名詞的表現と簡潔・明快な表現も可能ではあるが，しかし本来の膠着語としての性格は依然濃厚であり，英中両国語にこの点では及ばざるところが存している様である．更にこれには冒頭にも触れた如く，各国の文化的背景の違いから来る人間相互のコミュニケイションの在り方の違いも大きく，それが又実際の言語現象にも影響を与えているだろうことも否めまい．

さて再び本題に戻って，英語の名詞的表現の例をもう2，3探ってみよう．

① Give me a lift (a ride), will you?

② Give it a try.　③ I'll give you a shout.

この辺りの例文もすでに余りにも familiar なものばかりで今更説明するまでもないが，①②③のいずれも，ride, try, shout が名詞として使われているが，日本語ではこれらはすべて動詞として表現されるところであろう．注目すべきことに，ここではこれらのこと

ばはすべて動詞・名詞が同型でそのまま両者に使われるわけであるが，これも又日本語には見られない英語独得の用語法と云えよう．（品詞の転用＝Functional shift）．更に次の様な例文は如何であろう．

She has blue eyes and blond hair.

I have a headache. I have a sore throat.

これらの例文も一見何に気なく見過しがちだがよく考えてみると日本語の表現と違うことに気付く．これらもやはり広義の名詞表現と云えよう．更に I began to study English **with renewed interest**. に於ても，ゴシック体の表現もやはり名詞表現であると云える．

He suffered from **repeated headache**. も同様名詞表現の一種である．これらは謂わば純粋に言語現象面における名詞表現であるのに比べ，前述でくどくどしく説明した様な名詞を謂わば生の形でぶつける様な表現形式には単なる言語上の現象と云うよりも，その背後に何かやはり人間の心理的・文化的・社会的な在り方の違いの様なものがある様に思えてならないのであるが，その辺りの分析はいずれ又別の機会にゆずりたい．

ゲーテの有名なことばに，「外国語を知らぬ者は自国語をも知らない」と云うのがあるが，これは誠に至言である．確かに外国語に対する深い理解と知識は自国語への鋭い観察眼と深い洞察力を養成してくれる様である．日本語の動詞中心型の叙述的・動態的表現に気付くのも，英語の名詞中心型の物理的・静態的表現を知り得て後始めて可能なのである．これらの例について更にもう少し検討英語における名詞表現の多様な相に気付いてほしいのである．

「壁に**かけてある**地図を見なさい」と云う文の中で，和文は「かけてある」と云う生の動詞を使っているが，これは英語ではどの様に表現されるか？　答は明らかである．次の様になろう．Look at the map on the wall.　ここでは「かけてある」と云う和文の動詞部分は，on と云う前置詞で表現されていて，この部分は英語では，地図の物理的位置関係が静態的に図式的に描写されていて，決して日本語のそれの様な動作的叙述は伴なわれない．英語の諺に次の様な例があるが，Out of sight, out of mind. これも，日本語に訳せば，「去る者，日々に疎し」．とでもなるのであろうが，これに似たものに Out of temper, out of money. があるが，これなどは漢語的に「短気は損気」とかなり名詞語句だけで云っているが，しかし本質的な表現の差異は否めない．この他この out of を使った表現は枚挙にいとまもなく，out of practice（練習不足で），out of work（失業して）out of money（お金がなく）out of order（故障している）out of gas（ガス欠で）etc., いくらでもあるが，これのいずれも日本語では何か生の動詞を使って（場合によっては動詞を二重にかさねて使う場合もある）動作的に叙述されるところであろうが，英語では be 動詞との組合せで静態的，空間物理的叙述となっている．更に「手を触れてはいけません」なども，英語では Hands off. であり，「ペンキ塗り立て」は単に Wet Paint（湿ったペンキ）と云って名詞をそのままの形で投げ出しているに過ぎない．更には例の附帯的状況を表わす with を用いた表現，例えば with your mouth full, with her eyes full of tears, with his legs crossed, etc., の表現も又名詞表現の一面である．

さて英語では無生物・抽象名詞主語の多用の結果として，受動態の表現が非常に多い．併し勿論それだけの理由で passive voice が用いられているわけではなく，精神的・感情的行為を表わす他動詞は主として受身の形で用いられるのが普通であり，この辺りの態の扱いの相異は和文と英文にはかなりの差がある．「私の父は第二次世界大戦で死んだ」は，My father **was killed** in the second world war. となろう．これは直接には名詞表現と

関係は無い様だが，よく考えると，父は好きこのんで死んだのではなく，何かに殺されたのであろうから，そう考えると実はこの文も又物主構文の active voice が passive で表現されただけのものと考えられなくもない．

面白い例としては，もう日本語の云いまわしの中に入って何気なく日本人が使っている（そして確かに便利である．何故なら日本語の様に文章完結式に云わなくてすむ数少い例になるからだ）名詞表現として，例の No comment, No money, No more Hiroshima's, No, thank you, Good timing, 等々はこの英語のままで（日本語の動詞や助詞等を特に附加しなくとも）使用可能である．

一風変った名詞構文（これを名詞的表現の文と云えるか否かについては若干の疑義が存するが）としては，We parted good friends. His father died a billionaire. 等においては，日本語ではそれぞれ good friends, a billionaire の前に as でもほしいところであろうが，英語でここに as を入れると，全体の引締った感じの文章が弛んでしまって間が抜けてしまう．引締った力強い表現はやはり名詞ズバリが用いられている所にこそ存するのだとすれば，これも立派な名詞表現の文だと云ってもよかろう．それから少し重複する面もあるかも知れないが，我々がよく英語のテレビ・ラジオニュースを聞いている時に，日本語だとワシントン発などと云うところを英語ニュースだと単に Washington! と大声でそのままの地名をぶつけているだけなのに気付く，更に時報の時も同様で，日本語のアナウンスの場合は，「ただ今8時をお知らせ致しました」とか「八時の時報でございます」等々実に冗長な云い方であるが，これが英語流となると "Eight o'clock" とどなるだけである．実に力強い名詞表現ではないか．会社などに電話をかけた場合，アチラの場合はよく会社名だけを operator ないしは係の者が叫んで寄こす場合がある，例えば Canadian Pacific Airlines! と云う具合であるがこれなども日本の会社であればこうはいくまい．おそらく長たらしい文章になるのではあるまいか，例えば，「こちらはカナダ太平洋航空でございます．どなた様に御用でございましょうか」云々と．この差は考えてみればどうでもよいものかも知れないが，この様な差異が積りつもって出来てくる全体の英文と和文の与える印象は非常にちがったものとして表われてくるであろう．確かに英語はデンマークの世界的言語学者イエスペルセンの云う如く非常に男性的な力強く簡潔表現を好む迫力ある言語であるが，それはこれまで詳述してきた様な名詞中心型の種々の表現に負う所が非常に多いと思われる．更にはイエスペルセンも云う如く，英語の sound system の中で母音に比べて子音の占める割合が高く，音声面からも又他の諸言語例えば日本語（母音の多いことで知られる音声・音韻組織をもっている）に比してはるかに男性的な響をもった言語である．勿論これには英語は stress accent, 日本語は pitch accent と云った，アクセント上の差異も原因となっている．よく西欧人は日本人のしゃべっているのを見て，よく口を動かせずに喋れるものだなどと皮肉な感想をもらす者もいるが，たしかに日本語のように母音の多い音韻組織を持った言語は，口をあまり動かさなくとも発音出来るのかも知れぬ．それが証拠に我々が英語を学習している際に，カタカナ式発音で英語を読んでもあまり疲れないが，英語らしく無精せずロや唇，舌などを動かし，息使いも荒く発音すると，非常にエネルギーの消耗がひどく，疲れ易い経験が一再ならずあったことを筆者も憶えている．

ところで名詞中心の表現の特質をもう少し具体的に考察してみるに，先述した如く，英語の場合，動作よりはむしろ状態に重きが置かれ，物理的・空間的位置関係（具体的には前置詞の多用が考えられる）および動作の結果に重きが置かれる．（結果を表わす前置詞の to などはその典型．He was stabbed *to* death. Her house was burnt *to* ashes. など

がその例となるが，これを和訳してみれば，各文動詞はそれぞれ2つ必要となろう）．大和言葉ではこの動詞多用は漢語を借りない場合更にひどく，三つの動詞が重なり合って用いられる場合さえある．（例，「やってみてごらん」「行ってみてミー（大阪方言），「出て来て居る（出席している意），「泣き笑いする」etc.）

さてこのこととは別に，更に名詞表現の与える効果としては，やはりその具体性，分り易さ，印象に強く残り，イメージがすぐに頭に浮ぶ等のことが挙げられよう．その何よりの証拠は我々が外国語を学ぶ際，どの品詞がもっとも解り易く，とり付き易いであろうか．それは云うまでもなく名詞であろう．具体的に目に見え（visible）手で触れることの出来る（tangible）具象的な名詞，日常の卑近な道具・身廻り品等々が何と云っても，憶え易いのではあるまいか．更に身体の各部分の名称などもこれに加えられよう．ところで実は英語にはこれら具体的な名詞を使用した表現が非常に多いのである．それらが簡単な motor verb (Basic English の考案者である C. K. Ogden 氏のあげた基本的動詞10数箇，come, lay, set, fall, look, stand, get, put, take, go, run, turn, etc. のことを指す）と組合されて慣用的に使用され，非常に解り易く，具体的で重宝である．勿論日本語にもその様な表現が無いわけではなく，身体各所を使った表現は日本語でもかなり多い．ただ日本語のその様な表現の場合は，それら具体的な名詞の外にどうしても生の形の動詞が併用される（場合によっては2ツ3ツと連動的に使用される）場合が多く，その為折角の具体的な解り易い表現が帳消しされるおそれが無いとは云えない．（このことは特に日本語を始めて外国語として学ぶ外国人の場合，具体的名詞と共にそれと併用されている2重・3重の動詞も同時に覚えねばならず負担はそれだけ大きくなる）

例えば，「手を携えて」，「耳をほじくって聞く」「口をそろえて」「顔突き合わせて」etc. の場合，英語では「hand in hand」，「be all ears」「with one mouth」「face to face (or nose to nose)」等に見られる如く，すべて具体的な名詞と前置詞の組合せからなり，せいぜいあとの動詞は be 動詞なり have 動詞なりで，最大限行っても前述の motor verb (give, go, come, put, keep, make, etc.) 止まりではなかろうか．この辺りの表現法も日英両語間の特性がもろに出ていて大変興味深い．

以上色々な角度から，英語に於ける名詞的表現の諸相を研究してきたのであるが，勿論，名詞構文のみが英語を日本語から際立たせている特徴ではない．その他にも色々の相異が両語間に横わっており，文章表現形式のみならず，音韻・音声組織上からも，更には文化的・心理的・社会的な観点からも日英両語間の相異を探ることは可能であり，その為には非常に息の長い綿密な調査研究と具体的な例証が必要とされる．従ってそのための若干の例文を，最後に掲げておくことにして，取敢えずこの小論文では，英語をして最も英語らしくさせている特性としての名詞的表現を取上げ，それを動詞的表現に重きを置く日本語との比較に於て，若干の考察を試みたのである．

II 英語に於ける名詞中心的表現の若干例

以下に英語名詞表現の若干例を掲げ，その日本語表現との比較について筆者なりの若干の考察を試みてみた．

(1) It rains cats and dogs.（雨がどしゃぶりに降る）

〔これは一種の idiomatic な表現であるが，例の修辞学（rhetoric）で云う metaphor とも云えるのであるが，外に He was a lion in the fight.（彼は獅子奮迅の戦いぶりであった．）などもあるが．いずれにせよ．simile（直喩）については勿論，metaphor（隠喩）

についても，その表現の中心が名詞によって行われている場合が極めて多い〕

(2) She called him names. (彼女は彼を悪しざまにののしった)〔これも names と名詞を用いている．go places なる句があるが，これも places なる名詞が使われているが，この場合はこの名詞は副詞的に用いられているのであろう．この様に名詞が副詞的に用いられる例は英語に多い．He'll come any minute. (彼は今にもやって来ます) Talking to them, trying to probe inside them, gets you no place. (彼等の内部事情を知ろうとして，彼等と話してみたって，何も出てきませんよ.) これらの場合の，any minute, no place などが名詞の形をとっているが，副詞的に使われている〕

(3) Only thing, they've lost the faculty for caring much. (ただ，彼等が十分に気を配る能力を失くしたと云うことだけなんだ.)〔これも，only thing と名詞がそのままの形でぶつけられている．Funny thing,～ の型もある〕

(4) Listen, cop, I'll go with niggers so long as white men look like you. (ねえ，お巡りよ，白人があんたの様な面してる限り，俺は黒人の側につくよ.)〔さてここでは，cop (警官に対する蔑称) なる名詞が，そのままぶつけられているのだが，この様な呼称の仕方は，cop に限らず，殆んどすべての呼称に用いられる．又挨拶語なども．Good morning, Good night 等々に見る如く，名詞的表現となっている．これら人に対する呼称，日常挨拶語，口語感情表現などに於ける名詞表現の実相については稿を改めて詳述する積りでいる.〕

(5) I don't care a dump about it. (そんなこと，ちっとも気にしない) It's not worth a dump. (それは何の値打ちもない)〔ここでは，a dump (場合によっては a straw とも云う) なる名詞がそのままの形で，副詞的に，或いは名詞のままで形容詞の目的語としても使われている〕

(6) Be a good boy. (おとなしくしなさい (親が子に云う))
Don't be a stickler. (つまらぬことをツベコベ云うな)
Don't be a hero. (良い恰好するな)
〔この様な例は数多くあるので，いずれにせよ表現の中心が名詞主体に置かれている．それに比し，日本語では殆んど例外なく，動詞中心的な表現となっている〕

(7) Off Limits (立入禁止)，Hands off (手を触れるべからず)，Wet Paint (ペンキ塗り立て) Under repair(s) (修理中) On the air (放送中) Out of gas (今ガソリンを切らしています，ガソリン・スタンド等の掲示) etc.
〔この様な掲示等における名詞的表現も英語には非常に多い．例えば out of order (故障) などもあるが，これなども，日本では「故障」とだけ掲示することもないとは云わないが，例えばトイレのドアなどでは，むしろ，「故障のため他の便所を御使用下さい」と云った形の文章体で云う場合の方が多いのではなかろうかと考えられる．上述の Out of gas も，石油危機の頃アメリカなどで gas station によく見かけた掲示なのだが，これも日本では「ガソリン不足」だの「ガソリン切れ」だけの掲示は先ず考えられず，必ず，「すみませんが，ガソリン不足の為，閉店させて頂きます」云々と云った具合に文章体をとるものと当然考えられる〕

(8) Her face identifies her as an Oriental. (彼女の顔を見れば，彼女が東洋からやって来たことが分る)〔これは例のよく知られた，無生物主語の例で，今更説明の要もあるまい．抽象名詞が主語となるものには，Despair drove him to suicide. (絶望して彼は自殺してしまった) などがあり，これも又あまりにも数が多い.〕

(9) Don't speak with your mouth full. (口に一杯食物を入れたままで話してはいけな

い.) She listened to him with her eyes closed. (彼女は目を閉じたままで彼の話を聞いていた)〔これは例の附帯状況を表わす with＋名詞＋名詞の補語の形で，これもやはり名詞表現の一種と考えてよい．又英語ではこの附帯的状況をいわゆる状況補語として，分詞構文を使っても表わされるが，いずれにせよ，そのことによって，日本語では複文形式となる文章が，英語では単文で表わされることが多い．実に前置詞の with や，分詞構文における ～ing-form が略され，名詞ズバリで状況補語が表わされることさえある．A robber dashed out of the bank, gun in hand. (一人の強盗が手に銃を持って，銀行から飛び出してきた) この場合の gun in hand は with a gun in his hand, 又は holding a gun in his hand の略形と考えられる〕

(10) There was an abandoned car on the roadside (誰れも乗っていない車が道端に置き去りにされていた)〔英語では動詞はただの一つ，be 動詞だけで，しかもこれは動作動詞ではない．勿論この場合 abandoned も元々は動詞であるが，この様な形で使われると，もはや動詞の性格よりも形容詞の性格の方がはるかに強く，現に後に来る名詞を修飾している以上その働きは形容詞である．更に英語で abandoned car と云えば，誰も乗っていない車であることまで表わしているので，和文の様に動詞多用の冗長な云い廻しにはならない．勿論和文でも，出だしの部分，「誰も乗っていない～」のところの省略は可能であるが，よく和文には上例の様な，「英文から見れば」ムダで冗長と思われる表現が数多くあり，良し悪しは別として，その様な表現が和文の一つの特徴であることは知っておいてよい．尤もこの問題はその逆も又云える場合があり，やはりそれぞれの言語の持つ慣用なり性格から来ているものであり，その様な表現上の差異を研究することがまさに本論文の主旨であり，その意味で英語の名詞的表現に的を絞ってここでは考察を進めているのである．

(11) I hope you'll give me a raise one of these days. (近い中に私の給料を上げていただけるものと希望しています)〔これは例の S＋V＋O＋O の文型における名詞表現でこの型の名詞表現は実に多い．

Give me a lift, will you? (車に乗せてくんない)

Will you do me a favor? (お願いしたいことがあるのですが) It cost him his life. (彼はそのことを生命まで犠牲にしてやった.) この例は，物主構文であると共に，2重目的語をとる cost なる動詞を使って，名詞的表現を作っている.〕

(12) Let's have a chat, shall we? (おしゃべりしましょうか) Take a look at it. (それをちょっと見てごらん) He made a hurried exit. (彼は急いで退出した)〔これらはいずれも，have, take, make, give etc. の謂ゆる colorless verb ＋ a (この部分は多少の変化をする) ＋名詞の型で名詞的表現を作るものであり，特に口語英語の表現に多い．これらはいずれも重要と思われる語を名詞で表わすことにより，その印象が強烈に，鮮明に相手に伝わる効果が期待出来ることと，その名詞に自由に修飾語としての形容詞を冠せることが出来て細かい nuance が表わせると云う merit があり，これは先述の S＋V＋O＋O の文型についても，全く同様のことが云えるのである.〕

(13) The beauty of Mt. Fuji is beyond description. (富士山の美しさは筆舌に尽し難い)

Don't disturb the class in progress. (授業の行われているクラスの邪魔をしてはいけない)〔さて前置詞と名詞の結合より作られる形容詞，副詞句が英語には非常にその数が多くこれらもやはり名詞がその句の主体となっていることから名詞表現の一種と見てよい.〕

(14) He was all business. (彼は商売の鬼だった) She is all woman. (彼女は全く女らし

い女だ.) He is honesty itself. (彼は正直そのものである)〔これらも典型的な名詞表現であり，本来の意味からは形容詞で表わされるところであろうが，それを更に意味を強めるとこの様に all＋抽象名詞或いは，抽象名詞＋ itself の形をとる.〕

(15) That is no news. (そんなことは珍しくもない) What you say is news to me. (あなたの云われることは私には初耳です)〔最初の例は，典型的な英語名詞表現である．日本語でこれを名詞表現を用いて云い換えることは，まず無理であろう．併し後の例については，日本語でも「初耳」と云う名詞的表現となっており，やはり日本語にも英語に似た名詞表現もある〕

(16) That's a good buy. (それは掘り出し物だ)〔これは日本語でも「掘り出し物」と云う様に一応名詞的な表現が使われているが，英語の buy と云う動詞がそのまま名詞として使われている形とはかなり異なる．即ち膠着語たる日本語の特性として，名詞表現を構成している語そのものの中味は，2重動詞が使われ膠着的に後に来る被修飾語たる名詞に続いて行く．従って同じ名詞表現とは云え，やはりその内容には相異もある．やはり日本語の場合，特にこの「掘り出し物」と云った名詞は実は動詞的な響きが強く，英語に於ける程の簡潔な名詞表現の効果は出ていない様である〕

(17) Rola! (ローラ!)〔生徒が女教師を first name で呼んでいる．これについては既に何度も言及しているので，ここでは論及しないが，とにかく，日英語間の，外面的，内面的なミゾの深さを感じさせる表現ではある.〕

(18) She is a great contrast to her sister. (彼女は妹とは似ても似つかない)〔これも典型的な英語名詞表現と云える．特に日本語の「似ても似つかない」と云う動詞多用の表現に気を付けたい．この様な表現が日本語には実に多い〕

(19) She is a psychology major. (彼女は大学で心理学を専攻しています.)〔この場合，(彼女は心理学専攻の学生です) と若干英語に近く名詞的表現の訳も可能であるが，その場合でもやはり，「～専攻の」と云う様に，～を専攻していると云った動作叙述的響きが残っており，更にもっと云えば，「心理学を専攻している」と云うのが本意で，文章体をとって膠着的に最後の学生なる名詞に及んで行くわけで，とても英語に於ける，a psychology major の如く，2語の名詞がただ並列的に列べられていると云った形での名詞表現には成りにくい．つまり英語では，この場合 major と云う名詞一語の中に，「～を専攻している学生」の意があり，この様な語に見る様な型の名詞の存在が，英語名詞表現の簡潔さに拍車をかけている.

ところで，この名詞を並列的に羅列して行くやり方は，実は日本語の中にも数多くあるので，何も英語に限ったことではない．否むしろ漢語を借りて，数語以上にもわたる名詞の羅列が行えるのは日本語の方であって，英語はこの点では少し見劣りがするが，併し，例えば「食堂の窓」などと云う場合，日本語ではどうしても「食堂の」の如く，「の」が必要で，「食堂窓」とはこの場合どうしても無理であるが，英語では，the dining-room window の如く名詞のみの羅列が可能である．この辺りは大変興味深い問題で，別の機会があれば詳述してみたい.〕

(20) She had the kindness to invite me to dinner. (彼女は親切にも私をディナーに招待してくれた)〔これも have＋the＋抽象名詞＋to 不定詞の型の名詞表現で，意味としては be so ＋形＋ as to 動詞，be＋形＋＋enough to 動詞の型であり，この方が和訳の場合は分りやすいのは，やはり和文にはこの様な型の名詞表現を欠くからであろう〕

さて英語名詞表現の様態は実に多種多様であり，とてもこの様な小論文の中で論述しつ

くせるものではない．ここではその諸相の一端を窺い見たに過ぎず，又その例文，実例も数多く，ここに際限なくそれらの諸例をその名詞表現の諸相に応じて挙げて行ってもきりがない．そこでそれらの諸例は，本文にも若干例は掲げてきたことでもあるし，それ以上重複してもいけないので，ここではこれ以上の実例は止めておくが，最後にこの様な名詞表現が何故英語ではよく好んで用いられるのか，又その様な表現の効果は奈辺にあるのかと云った問題について，ざっと簡単に見ておきたい．云うまでもなく名詞は他の幾つかある品詞に比べても，我々にとって最も身近かで，分り易い存在である．つまりそれは手にとって見れる，tangible な visible な存在である．勿論名詞と云っても抽象名詞などは，intangible であり invisible なもので，その意味では同じ名詞と云っても少し性格は異なるが，その場合でも，名詞一般の持つもう一つの側面，つまり「静止している，安定的要素」と云った点で，やはり動詞や形容詞などとは異る．更に名詞はそれ自体で意味が完結しているのに比し，動詞，形容詞，副詞等々はそれ自体では必ずしもその意味が完結せず，名詞や代名詞の力を借りて始めてその存在が確認されると云った場合が考えられる．それらのことなどを考え合せて行くと，やはり名詞の持つ独得の属性として，「分り易さ」，「身近かさ」，「静的で，意味の自立性」等々が浮かび上ってくる．と同時にそのことは更に次の様な結論へも導いて行くのではなかろうか．つまり名詞が意味において「自己完結型」であり，それ自体非常に分りやすい，物的にも，心的にも把握しやすいものであることは，換言すれば，他の品詞と組んで文章体とならなくとも，名詞だけで十分にその意味が理解され得ることが可能であることを意味する．名詞をそのままズバリぶっつけても意味がそれなりに分るのであれば，何もいちいち冗長な文章体とすることもないわけである．と云うことは，英語に名詞表現が多いと云うのは，英米人が冗長な物の云い様を嫌って最もコトバの経済性に則して，なお且つその意味も不明瞭とならない為に名詞を主体とした名詞表現を好んで用いる様になったのか，たまたま名詞が一番その意味が理解しやすい為に，敢えて文章体をとらず，そのまま名詞を中心にコトバをやりとりして事を済ませる様な習慣が出来上ったのか，そのいずれかはわからぬが，英語に簡潔で，従って又力強い表現が可能となるのは，この名詞表現に負う所が大きい．それでは日本語に名詞表現が存在しないのかと云えば，勿論そんなことはなく，特に漢語表現を借りた名詞表現が日本語にもあるにはあるのだが，どうも日常の挨拶語や，他人に対する呼称，日常卑近な生活上の口語表現，喜怒哀楽をめぐる人間の感情表現などに於て名詞そのものズバリをぶつける形での名詞表現と云うものは極めて少い．これには云うまでもなく，日本の社会に於ける一個の人間の生き方，有り様，更に人間相互間の関わり方，つまり日本の社会では，人間とは先ず如何なるものであって，而して人間はどの様に生き，どの様に振舞うべきであるか等々の，社会の側から要求され期待される人間像なるものが，永年の伝統文化の上に築かれ，それが日本人の道徳観なり倫理観を形造っている．その様な倫理・道徳観念に照らして，当然それにふさわしい「言葉遣い」なるものも存在しなければならない．日本の社会を構成する各成員が，先天的および後天的に己れに与えられた「分限」にふさわしく，その言葉遣いも配慮されて行かねばならない．その際に，英語における如き，日常口語表現での「名詞表現」なるものが，日本語に於ける「ふさわしい言葉遣い」なるものと，どうも馴染まないと云ったところがあるのではないか．つまりここで云う，「ふさわしい言葉遣い」なるもののその殆んどは文章体の構成であり，更にその上に日本語特有の敬語表現が加わってくる場合が多く，この敬語表現も又，英語の名詞表現とは馴染まぬものの一つである．併し問題は実はどうもこれだけでもなさそうだ．やはり日本語本来の文法，語法

等々が名詞表現に馴染みにくい面を持っている事実も見逃がせまい．例えば，日本語の表現なり，描写なりは，動作を中心とする行為に重きを置いた表現が主体であり，従って当然にも動詞多用型であり，更にその膠着語としての本来の性格から，日本語の動詞の活用変化は英語のそれの如きテンスとは無関係で，ただ次の来るべき語への連絡を主な目的としている．従ってこの様な日本語の動詞中心の「動作・行為」主体の叙述表現法が，英語の如き，名詞中心の「物理的，空間的な描写」や「状態・結果」主体の物理的，静態的表現法と相容れぬ側面を持つのも又至極当然のことなのである．この問題についてはこれまでにも若干の記述をなして来たことでもあり，これ以上ここでは本題から若干それることもあって詳述は差し控えるが，何れにせよ英語においてその「名詞表現」なるものが，日本語に比し，一つの大きな特徴となっている独特の英語らしい表現法の一つであることはお分り頂けたものと思う．

尤もこれまでにも触れてきた如く，英語において名詞中心的な表現が多く，日本語に於いて比較的それが少いことの理由は，単に両言語に固有の表現法の差異から来るものが決定的ではあるのだが，同時に日本語に於いて，伝統的な，日本的文化価値体系（主として，儒教的な人倫関係および，神道・仏教の基本的理念に基づく自然観・人間観より成る）の下での，人間として，「ふさわしい」，「本来あるべき」姿として，その社会の各成員に要求される，「言葉遣い」なるものが，直截に感情を表現したり，合理的でスピーディな情報交換を主体としたコミュニケイションを阻害してきた結果として，明快な名詞ズバリの表現（実はこれは名詞のみに止まらず，形容詞や副詞等他の品詞についても同様のことが云えるのであるが）が，日本語に於いて発達していないことの一面の原因として考えられるのである．必要以上の感情抑制と，「丁寧さ」のみが過度に要求され，社会的地位，身分，長幼の別，男女の別，先輩・後輩の関係等々，タテの人間関係に極めて過敏な人間集団に於ける言語の実相は，やはり，明快，簡潔で力強いキビキビした英語に於ける如き「名詞表現」とは相容れぬものと思える．何れにせよ，単に名詞表現一つを採ってみても，色々の角度からこれを眺めることが出来ると云うことは興味深く意義あることでもあると思う．

参考文献

"Growth and Structure of the English Language" by Otto Jespersen.
"Basic English" by C. K. Ogden (1930 年).
New English Dictionary (NED or OED) & Webster.
E. I. Thorndike:「一萬語表」(1930年)
E. Horn:「一萬語表」(1926年)
"Journey into Crime" by Don Whitehead.
"Diary of a D. A." by Martin M. Frank.
"The Green Felt Jungle" by Ed Reid and Ovid Demaris.
"The FBI in Action" by Ken Jones.
"Papa's Game" by Gregory Wallance.
"The Train Robbers" by Piers Paul Read.
"The Adventure of Tom Sawyer" by Mark Twain.
新版　広辞林：金沢庄三郎編　三省堂．

Summary

It is common knowledge that English is quite different from Japanese in many ways because these two languages belong to two completely different language families, that is, the former belongs to the Indo-European language family, and the latter the Ural-Altaic language family.

In this essay, special attention is paid to the role of noun and verb between the two languages, to be more exact, the different roles in importance of the two parts of speech between English and Japanese.

A close comparative study of the two languages reveals that English is a noun-centered language, whereas Japanese is a verb-centered one. In English, the most important idea or thing tends to be expressed in the form of noun or noun-equivalents. Noun is the very core of most sentences in English. On the contrary, in Japanese, most phrases or expressions are verb-centered. In other words, verb plays the most important role in most phrases, idioms, expressions in Japanese. For example, it is very rare in Japanese that the inanimate can be used as subject words. This contributes to the verb-centeredness of the Japanese language. Also, in Japanese, the so-called honorific expressions are highly developed, and this is another reason for the frequent use of verb-oriented expressions in Japanese, for most honorific expressions consist of verbs or verb-equivalents in Japanese.

English is quite a far cry from Japanese on this point. Such highly sophisticated honorific expressions as in Japanese have never been developed throughout the history of the English language. Which means the English-speaking people seem to be far more casual in their daily verbal communication than the Japanese. This seems to have contributed to the development of noun-centered expressions in English, for as casual-minded conversationalists, the English-speaking people have no good reason for the use of such many redundant verb-oriented expressions as in Japanese. Of course, this is not the only reason for the frequent use of the noun-oriented expressions in English. There must be some other reasons for that, but they still remain to be seen. Also, we must know that these noun-centered expressions in English have their different aspects, according to the different situations and contexts. The best way to study them is to show as many examples as possible, so here in this essay some examples are shown, but never enough of them. But even from those examples shown here, we can see the noun-orientedness of the English language as against the verb-orientedness of the Japanese language.

Last but not least, the social structure in Japan based on highly-developed hierarchy seems to have contributed to the scarcity of noun-centered expressions in Japanese, where a number of redundant, honorific expressions and phrases were preferably used among those from all walks of life. In such linguistic environs, 'the longer phrase, the better' is the basic principle of each speaker of the language.